若者には博覧会の体験を通じてもっと世界に共感してほしい！

京都精華大学前学長
2025年日本国際博覧会協会副会長・理事
ウスビ・サコ
Oussouby SACKO

国際博覧会は5年に1度開催される一大イベントであり、各国がその誘致を巡ってしのぎを削っている。その中で1970年にアジア初の国際博覧会が開催されたのは日本においてであり、一般博・登録博としては2005年の愛・地球博を経て、今回が3度目の開催となる。さらに大阪での開催は、これで2度目のことであり、開催国がほぼ欧米に限られていた20世紀前半までの国際博覧会以降では例を見ないことである。

人類全体が幸福を実現するためのモデルを示す

21世紀に入ってから、人々の距離が境界を越えて接近し、人類が共通して同じ課題、しかも一国では解決不可能な課題に取り組まなければならなくなった。国の威信を示す場であった19世紀から20世紀にかけての万国博覧会と比較すれば、21世紀の万国博覧会は、世界の多様な主体による「共創」を促し、環境問題、地域格差、宗教対立、貧困問題などを乗り越えて人類全体が幸福を実現するためのモデルを示すことが重要となるだろう。

3年後に開催が迫った2025年大阪・関西万博のメインテーマ、即ち「いのち輝く未来社会のデザイン」と、サブテーマとして挙げられた3つの項目――Saving Lives（いのちを救う）、Empowering Lives（いのちに力を与える）Connecting Lives（いのちをつなぐ）――は、まさに我々がこうしたグローバ

ルな問題の解決に力を合わせて立ち向かい、国連が定めた持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）を達成するための道筋を意識した内容となっており、会場はこれらの具現化と実現のための未来社会の実験場、People's Living Labだと謳われている。他方で、国境や地域を越えた人々や資本の移動によってもたらされた新型コロナウイルスの世界的な感染拡大が２年以上に及び、これに伴う世界経済の不調と地域のブロック化が次第に顕在化してきたことは、これまでのグローバル化を目指す価値基準を根底から揺さぶっている。

気付きと共感を獲得し、来場者同士の響き合いをも体験する

若者の人格形成や社会との接続、不確定な未来への備えを用意する学校教育や地域教育もまた、確たる方向性が見いだせないままである。２０２５年大阪・関西万博は、世界が今一度「共創」を実現し、人類が目指すべき方向性を世界に向けて発信する機会とならなければならない。教育や芸術の分野では、Project Based LearningやSocially Engaged Artなど、主体的かつ協働的な問題解決を意識した転換が進みつつある。こうした転換を実現しつつある教育現場やアート・イベントに参加してみると、ただ教育やイベントの成り行きを学生や鑑賞者に丸投げするのではない、イベント・プランナーの綿密な準備と持続的な関与が必要であることに気付く。教科書と時間割を作ってしまえば教育は終わるのではなく、作品を展示してしまえば芸術は目的を果たしたというものでもない。おそらく２０２５年大阪・関西万博においても、各テーマパビリオンのプロデューサーは、こうした転換を意識しつつ、ハコモノとしての建築物だけでなく、そこで発生するイベントをもデザインしようとしていることだろう。世界各国・各地域からの来場者の一人ひとりが、「お客さん」としてではなく、まさに当事者となり、掲げられたテーマに対する気付きと共感を獲得し、さらには来場者同士の響き合いをも体験できるのではないだろうか。万博会場が未来社会の実験場となり、「People's Living Lab」となるというのは、こうした目標をも意識してのことだと理解している。

アイデンティティ・クライシスに苦しめられる時代に

教育現場に従事するひとりとして、近年、若者たちが何を感じ、何を考えているのか、ますます掴みどころがなくなったように感じることがある。その原因が分からないわけではない。彼らは、いわゆる「デジタル・ネーティブ」であり、物心ついた時点からパソコンや携帯電話が身の回りに存在し、インターネットを介した双方向のコミュニケーションが前提となった環境で成長してきた。世界情勢とプライベートなやりとりが区別なく彼らの端末にストレートに届く。現代人が1日に触れる情報量は、近世の人々が1年のうちに触れていた情報量、古代の人々が一生のうちに触れていた情報量に匹敵すると、まことしやかに言われる。事実、ＩＴの発展に伴う情報量の増大に直面し、多種多様な問題がじっくり考える暇もなく浮かんでは消えていくこ

とが常態化している。単一・均一な文化・社会の中で一生を過ごすというモデルは、グローバル化によって過去のものとなり、生活のあらゆる場面に、あらゆる種類のヒト、モノ、システムが現れ出るようになった結果、アイデンティティとは教育や伝統が作り出した幻想にすぎず、絶対的なものではないと思い知らされる場面が増えた。確かに現代とは、人々がアイデンティティ・クライシスに苦しめられる時代だとも言えるだろう。

岐路に立つ日本の若者――万博での体験が一生もののレガシーとして記憶されることを願う

今日、日本の若者が置かれている状況は、残念ながら恵まれているとは言えない。一時期、他国の情報インフラの先進性が喧伝され、その後に新しい産業分野においても目覚ましい発展を見せたことは記憶に新しい。メタバース、AI、IoT、AR、VRなど、我々の想像力を拡張し、行動を支援するツールとプラットフォームが次々と登場してくる中で、むしろ新興国が、旧来のインフラに依存する先進国を飛び越えて躍進するリープ・フロッグ現象が起こりやすくなっている。おそらく次の世紀に向けて、アフリカ、アジア、中南米の新興国が人口ボーナス期を迎え、世界経済と政治の中心も次第にこれらのエマージング・カントリーへとシフトすることが予想されよう。日本の若者がこのような岐路に立っていることを自覚し、この変化の中で主導的な役割を果たすことができるかどうかは、次の十数年のうちに明らかとなるだろう。

こうした困難な状況をあたかも潜在的に意識しているかのように、情報と課題の取捨選択や、心のよりどころの喪失に悩まされる若者が教育現場でも問題視されるようになった。私が勤務している大学では、ダイバーシティだけでなく、これまで効率重視に傾きがちだった高等教育において置き去りにされがちだったリベラルアーツをも教育の柱に据えている。それは、学生として旧来の価値観に立ち返らせるためではなく、本来のリベラルアーツが目指していた自由人の育成を標榜しているからである。

先ほど現代人の扱う情報量について「まことしやかに」という表現を用いた。というのも、ここでの「情報」は、ひたすら量的な性格のものと思えるからである。他方で現代の若者が、例えば駅の待合室で隣り合わせた初対面の人と会話して打ち解けるすべを知っているかは大いに疑わしい。そこで必要とされる知恵は、上述した「情報」とは異なる性質のものなのである。私が大学教育におけるリベラルアーツを重視するのは、「私とは何か?」という問いに立ち戻り、自己と他者を実体験とともに理解し、多様な価値観の共存に関する地に足のついたビジョンを獲得するうえで、大学ほどふさわしい場所はないと考えているからにほかならない。

2025年大阪・関西万博は、こうした場が老若男女の別なく世界中の人々に向かって広く開かれ、そしてそこでの体験が日本の若者にとっても一生モノのレガシーとして記憶される機会になることだろう。